

横手市雄物川町十足馬場地区の調査概要

高橋 学（雄勝城・駅家研究会）

I 調査目的と調査地点の選定

雄勝城・駅家研究会は、横手盆地内に存在したはずの雄勝城や雄勝郡衙・駅家、寺院等の関連する遺跡の所在地特定やそれぞれの遺跡が果たした役割を究明することを目指し、平成31年4月に発足した民間団体である。令和元年10月に第1回目の発掘調査を横手市雄物川町造山地区の蝦夷塚古墳群を対象に実施し、その結果報告は、前回の第46回古代城柵官衙遺跡検討会資料集（以下、前回資料集）や『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書－雄勝城等擬定地遺跡の検証－』（2020年3月、雄勝城・駅家研究会）として公刊した。

第2回目の発掘調査は、同じ造山地区の十足馬場地内を対象とした。当該地を選定した理由は、令和元年11月の秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が払田柵跡関連遺跡の調査として実施した**端袋**遺跡の発掘成果に基づく。

端袋遺跡は造山地区の北東部、県立雄物川高校の東側に位置し、調査の結果、溝跡と鋸造関連の工房跡の可能性がある豎穴状遺構等が検出され、出土遺物から雄勝城の造営時期と重なる奈良時代であることが確認された。溝跡は幅約1m、深さ約0.5mであり、東西方向に2条平行して発見され、溝間の距離は約10mある。平成18年には横手市教育委員会が端袋遺跡の東側に隣接する東柵遺跡を調査していたが、その際にも2条の溝跡が検出されていた。溝跡の配置を図上で確認すると、両者の2条とも同一線上に繋がることが判明し、その距離は約130mに達する（第1図の点線表示部）。わずかな調査範囲に過ぎないが、溝跡は土地の区画を示す地割り、あるいは道路側溝の可能性が高くなった。

端袋遺跡－東柵遺跡で検出された溝跡を西方向に延長させると、それは雄物川高校正門から西側に延びる道路（市道 雄物川高校2号線）と重なることが判明した。このことから、高校正門から延びる市道とは奈良時代に地割りが実施され、それが現在まで継続していると推定し、これに直交する造山－沼館を結ぶ南北道路（県道、主要地方道 湯沢雄物川大曲線）の成立も奈良時代に遡るのではないかと想定した。

これを受けて東西・南北道路の隣接地で、地権者からの承諾を得ることができた2地点を研究会としての第2回目発掘調査地に選定した（第1図）。周知の遺跡外にあたるため、十足馬場A地点、B地点として調査することにした。

2 調査要項

調査地 横手市雄物川町造山字十足馬場（A・B地点）

調査期間 令和2年11月1日～11月15日（実働11日間、15日：見学会）

調査面積 A地点 60m²（トレンチ1本） B地点 195m²（トレンチ4本）

協力団体 造山の歴史を語る会 横手市教育委員会文化財保護課 由理柵・駅家研究会

参加者 発掘作業ボランティア 延べ76名（実働8日間）

見学者 204名（うち、15日の見学会130名）

検出遺構 A地点 なし（ただし、奈良時代の盛土整地層を確認）

B地点 竪穴建物跡2棟 柱掘形9基、溝跡1条（いずれも奈良時代）

出土遺物 A地点 土師器（壺・甕）、須恵器（壺・甕・壺）

B地点 土師器（壺・甕）、須恵器（壺・蓋・甕・壺）、鉄製品



3 調査結果

（1）十足馬場A地点

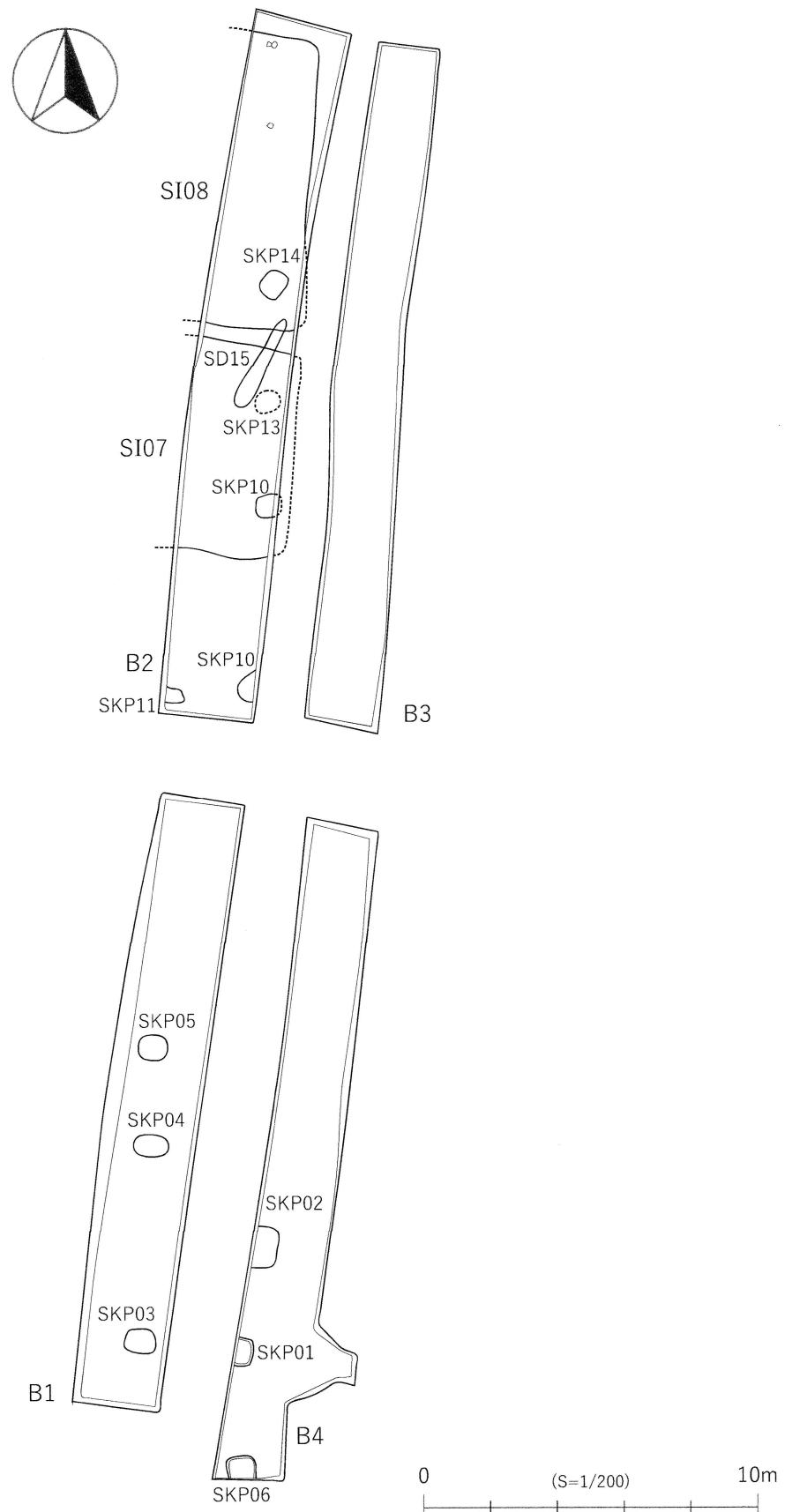
雄物川高校前の市道から北側に約40mの旧畠地（標高50m）に東西方向のトレンチ1本（幅2.5m×長さ24m、第2図A 1）を設定して精査を行った。

トレンチの西端から中央部では表土（耕作土）から20～25cm程で砂利層の地山（基盤層）に達するが、トレンチ東端では砂利層までの深さが1.1mあった。表土から砂利層までの間に黒色土層が形成され、その堆積層を観察すると次の所見を得ることができた。

本地点の旧地形は、高校寄りの東側に向かって傾斜しており、ここに黒色土で盛土整地を行い、平坦面を造成していることが判明した。黒色土中には奈良時代の土師器・須恵器が含まれることから、盛土整地の時期は雄勝城造営時期と重なる可能性がある。今回のトレンチ内から



第2図 十足馬場地区のトレンチ配置図



第3図 十足馬場B地点の検出遺構

明確な遺構の検出はなかったが、現在の地表面下25cmには奈良時代の生活面があり、調査区外の隣接地には建物・住居等の施設が存在していたと推定する。

(2) 十足馬場B地点

雄物川高校前の市道から約150m南、造山－沼館を結ぶ南北道路（県道）の東約50mの旧水田（標高51m）に南北方向のトレンチ4本（幅2～2.5m、長さ18～21m、第2図B 1～B 4）を設定して精査を行った、B 3を除く3本のトレンチ内から、竪穴建物跡や掘立柱建物を構成するであろう複数の柱掘形等が検出された（第3図）。

竪穴建物跡は、厚さ15～20cmの表土（水田耕作土）層下の黒色土層を掘り込み面とする2棟が約0.5mの間隔をおいて南北に並んで検出された。南側の1棟（第3図 SI07）は南北方向の長さが6.4m、北側（SI08）は8.8m、その深さは表土から0.65～0.70mであった。

SI08は北東隅部が確認でき、南側のSI07も隣接する東側のB 3トレンチからプランの検出がなかったことから、両棟とも竪穴東側壁面を揃えたものと推測される。なお、両者ともカマドや焼土は未確認である。



「驛長」？の墨書き土器（右：赤外線写真）

一方の柱掘形（SKP）は一辺が80～90cm程の隅丸方形もしくは橢円状を呈する。SKP01・06の2基を10cm程掘り下げたところ柱痕跡は確認できなかったが、ボーリング棒での探査により、深さが80～90cmに及ぶことが判明した。また柱掘形が竪穴建物と同じ軸線、南北方向に並ぶこと、SKP 01～06間、SKP10～13間、SKP13～14間の柱間距離が3.3m（11尺）であることも確認された。さらに遺構の配置や重複関係を整理すれば、（旧）SI 07→ SI08→ SKP10・13・14（新）となる。出土遺物は遺構内外を含め、おおむね8世紀代に限定され、竪穴建物と掘立柱建物とも南北方向に揃うことから、同一の計画・規制に基づく構築と建て替えが繰り返されたと類推される。

出土遺物のうち、SI08床面直上から3点の墨書き土器が出土した。墨書きはいずれも底面外側にあり、①「巳」

あるいは「己」(須恵器坏)、②判読不能(3文字か、須恵器坏)、③「□長」(2文字、土師器坏)である。①と②は隣り合って両者とも倒立して確認されたこと、①は欠損部がなく完全な形であることから、意図的に置かれたと見られる。③は一文字目の残画「署」と二文字目「長」のつく熟語から「驛長」の可能性もある。なお、③の土師器坏は、内面ミガキのち黒色処理、底部は静止糸切りのち体部下半～底面外周に手持ちケズリが入る。

4 十足馬場B地点の成果から読み取れること

十足馬場地区B地点から検出された、奈良時代の竪穴建物跡と掘立柱建物を構成する柱掘形、その軸線方向、さらにSI08床面直上出土の墨書き土器が「驛長」(=駅長)とすれば、どのような推測が可能となるのか。

横手盆地内には史料上、天平宝字3年〔759〕に「出羽山道駅路」が開通する。ここには、現在の山形県側に3駅(玉野-避翼-平戈)、秋田県側に3駅(横河-雄勝-助河)が置かれる。平成18年に刊行された『横手市史 史料編 古代・中世』によれば、玉野は尾花沢市、避翼は最上郡舟形町、平戈は同郡金山町、ここで県境(神室山北側の有屋峠か)を越えて秋田県に入り、横河は雄勝町(湯沢市)、雄勝は羽後町、助河は河辺町(秋田市河辺)とされる。なお、出羽山道駅路は史料上の名称ではなく、昭和48年に刊行された『出羽の国』(学生社)において、当時秋田大学教授であった新野直吉氏が初めて明示した用語である。

南北方向の県道を出羽山道駅路と仮定すれば、十足馬場地区に駅家あるいはその関連施設があったのではないか。とすれば、その駅家は「雄勝駅家」なのか。ただしその場合の最大の難点は、ここが平鹿郡域なのに「雄勝」と言えるのか、という一点に集約される。ところが考古学的成果を整理すると、本地區は「雄勝村」の一角を占めていたと推定ができるのである。

史料上では、『続日本紀』天平5年〔733〕12月条に、「雄勝村に郡を建て民を居く」とある。これが「雄勝」の地名の初見であり、条文の記述に従えば、733年以前から「雄勝村」は存在していたことになる。

横手盆地内の発掘調査による資料の蓄積は進んでおり、奈良時代の集落遺跡は20遺跡から約50棟の竪穴建物跡が発見されている。現在までのところ、1例(旧仙北郡、当時は山本郡)を除くすべては、横手市内(旧平鹿郡)での検出例であり、特に造山地区内に集中する。一方で、羽後町を含む雄勝郡内での確認例は一切ない。

のことからすれば、733年に雄勝村とされた場所とは旧平鹿郡内、特に集中箇所である造山地区が「雄勝村」の中核村であった可能性が高く、後の759年にこの周辺に「雄勝駅家」が置かれたとしても不自然ではないと考える。

令和3年度、第3回目の発掘調査は、再び十足馬場地区B地点の隣接地を対象にする予定であり、上記の推定の可否を含め検証を継続していく。